

中谷宇吉郎先生をしのんで

孫 野 長 治*

われわれの敬愛する中谷先生は4月11日骨髄癌のため逝去された。4月上旬病勢改まりご親族・友人・門弟が東大病院にかけつけたが一時もちなおされ、この分ならば春の気象学会の節に上京してまたおめにかかれるものと楽しみにしていたが遂に空しかった。

先生は1900年7月4日のご出生で小松中学校、第四高等学校をへて東京帝国大学をご卒業後、理化学研究所の寺田寅彦先生の下で火花の研究にあたり、この間、実験物理学の流儀と文筆活動の伝統をうけつぎ、後年の輝かしい業跡の基礎をつちかわれた。英国の留学からご帰朝後、北大理学部へ赴任され研究対象として雪の結晶をえらばれた。このことが気象学の研究手段に実験物理学を導入する機運を作り、また有名な人工雪の研究が雲物理学発展の礎石として現在輝いている訳である。

昭和11年大演習の途次、天皇陛下が零下30度の低温室で先生の人工雪の実験をご覧になったが、当時としては異例のことで、後年文化映画「雪の結晶」を天覧に供した時も当時のことをよく覚えておられたと先生から承わった。昭和15年、雪の結晶の研究に対して学士院賞を受賞された。

先生が巾ひろく研究と文筆の両面に活躍されたのは戦時に入ってからである。当時世界に類のない低温科学研究所の開設に尽力され、また鉄道路盤の凍上、航空機の着氷、飛行場の霧等の問題の応用研究を組織的に遂行された。その成果は凍上防止のように実用化に至ったものもあれば戦時下のことと途中で中止されたものもある。しかし必要なことは基礎研究から出発するのが最も早道であるという実物教育は、先生の研究を手伝った門弟一同の大きな遺産であろう。

戦後、一般人の忙然自失してなすところを知らざる情勢下にあつていち早く、科学者の使命を食料増産の積極的な支援に求め、物理学者の立場から水田水温の上昇、融雪の促進の研究を北海道の農村に入って敢行されたこ

とは、先生の積極的な研究態度をものがたるとともに、引きつづいて行なわれた水害、水資源から国土計画の研究に至るまでの先駆的な役割とともに忘れられないものである。

昭和25年頃から研究の場をさらに米国にまで拡張された。すなわち雪氷凍土研究所で氷の単結晶、ハワイで凝結核、グリーンランドで冠雪、北極洋の T_3 及び現に進行中のピーター湖の氷ととどまることを知らない有様であった。しかしまにして思えば4回目のグリーンランド遠征が先生の死期を早めたものと、われわれとしては悔まれてならない。昭和31年国際雪氷学会の副会長に就任された。また昨年札幌で春の大会委員長を勤められたのが気象学会に姿を見せられた最後であろうか。

かねがね先生は「Snow Crystals」に匹敵する氷の単結晶の著述を進めていると申しておられたし、矢の催促をうけておられていたようである。そうしてほう大な氷の単結晶の資料を完成寸前の状態のまま逝かれてしまった。臨終にコホリ、コホリと唇を動かされたと承わったが、さぞかし心残りのことであつたと察せられる。

先生の活動は物理学・地球物理学にとどまらず数十冊の随筆集、映画の製作・南画・日本舞踊にまで及び、世人に文筆家と誤解された感すらある。しかし先生の文筆活動はあくまでも余技であり、いずれも余暇にものされたことは遺族の方や門下生のはっきりみてとったことである。しかし研究そのものも態度が如何に厳しかったにしろ楽しんでおられたことも確かであろう。

おもえば、思案にあまる時は厄介な相談を公私をえらばずもちかけてご迷惑をかけ、うまくいったことはこのこと自慢の報告にでかけても、ほんとうに喜んで頂ける唯一の師を失ったわれわれは、精も張りもない仕儀となつてしまった。しかし先生は広く開拓された分野にそれぞれ多くの後継者を残された。先生が真の教育者であれば、残された後継者はあとつぎの能力を受けついではずである。及ばずながら一同それぞれ手分けして先生の偉業を継承してゆく覚悟でいる。

* 北海道大学低温科学研究所